成果と課題〔表－44〕

学習グループごとに成果と課題を整理した。

〔表－44　成果と課題〕

スキルアップグループ	**成果**
	○生徒が将来の自立した生活を目指して，日常生活に必要な家事や生活必需品，日用品とは何かについて学ぶことができた。また，店舗に行き，販売される商品の種類や価格を実際に見て確かめることで，日常生活に必要な日用品について理解を深めることができた。 ○生徒が限られた予算内で買うことを意識して，調べた日用品の価格を比較したり合計額を計算したりして実際に購入する商品を選ぶことができるようになった。 ○買い物学習を通して，代金の支払いやお釣りとレシートの管理，領収証や収支報告書の作成・提出等の活動が，社会人としての義務や行動を意識した学習になった。
	課題
	○今後も将来の自立した生活に必要な身辺自立や家事について認識を深めるとともに，収入と支出，生活費の内訳や物の値段等について学んでいく必要がある。 ○買い物での商品選びや支払い，金銭の管理について経験を重ねて技能を身に付ける。 ○今後は自分が働いて得たお金を大切に使うために，収入と支出のバランスを考え，節約や貯蓄を意識しながら必要な買い物を行い，金銭を管理する力を身に付けていく必要がある。
チャレンジグループ	**成果**
	○模擬買い物をして，実際に買い物へいくという流れを繰り返した結果，模擬買い物を計 4 回，実際の買い物を 3 回行うことになり，買い物に関する知識・技能の確かな習得につながった。知識・技能が身に付いていく過程で，主体的な行動も見られるようになり，レジでの支払い動作については，ほとんどの生徒が一人でできるようになった。 ○教師が数直線ボードの数直線上に記入し，それを生徒が見て比較する，という手立てにより，3 位数の大小の理解が浅い生徒も，買いたい物の合計金額が，予算内に入るかどうか考えることができた。また，値札をよく見て，自発的に計算機で計算する姿が見られた。 ○レジでのやり取りを繰り返し練習したことで，必要なことを伝えたり，分からないことを質問したり，丁寧な言葉遣いで話したりする生徒の姿が見られるようになった。
	課題
	○予算と買いたい物の金額を比較するために用意した「数直線ボード」は，当初，生徒自らが記入し，活用することを想定していたが，数直線の学習経験がほぼな

	かった生徒たちには難しかった。そのため，教師が記入し，それを生徒が見て比較する，という手立てをとったが，今後，生徒達が自立的な買い物を目指すためには，自分で予算内に収めることが必要である。補助具など教材の工夫や，数学の時間の指導と連携しての指導を通して，概念形成を図っていくことが大切である。 ○今回の単元で学習し，できるようになったことを，保護者と共有し，生徒の実際の生活においても生かされていくことが重要であり，将来の生活につながると考える。

次の単元や次年度等への展望

本単元では，買い物の一連の流れを学習したり，自分の考えを基に商品を選んだり，金銭を管理する基本を学んだりした。今後の展望として，その範囲を家庭にも広げ，それぞれの家で必要な物を保護者からリクエストしてもらったり，家庭や教室などで必要なものを実際に考えたりする学習に取り組みたい。人の役に立つことへの喜びを得ながら生活に密着した学習が可能となる。買い物に限らず，体験的な活動を増やしていくことが重要であると考える。

このような体験的な単元を計画していくためには，単元計画の工夫が必要になってくる。高等部の時間割は，年度初めの計画のままでは，今回行ったような規模の生活単元学習における単元を組む期間が取りづらい現状もある。再度，学年間の連携や長期的な計画性に基づく年間指導計画の改善を行っていきたい。

また，生活単元学習の時間だけでなく，例えば，数学で硬貨の種類の識別や紙幣と硬貨の組合せによる数字の計算を学習したり，日常生活・学校生活の中で概算を取り入れたりすれば，円滑に計算できるようになり，学習の定着が図れると思われる。このように，教科横断的かつ実践的に幅広い学習を取り入れることも計画していきたい。

最後に，次年度への展望について述べたい。今年度は 2 年生，3 年生合同での学習を行い，生徒の実態に応じてグループに分けた学習で繰り返しながら定着を図ったり，支出の項目について知り金銭管理の基礎を学んだりすることができた。実践を通して学習への高い意欲や主体的な行動も多く見られたため，次年度は高等部全体の学習として計画することも考えられる。より実態に合わせた学習をねらったり，学年や実態毎にステップアップした活動を計画したりすることができるとも考える。今回の生活単元学習を通して，買い物や金銭を扱う学習の内容を見通せたことで，学部全体で様々な取り組みや学習が展開できることが分かった。

2　「児童生徒の確かな学びをつなぐポイント」の作成

(1)　1年次段階「児童生徒の確かな学びをつなぐポイント」図の作成

研究1年次の授業研究の取組のまとめについては，校内の全体研究会で学部ごとに発表した。それを受けて，学部間の教育のつながりをもたせるための「児童生徒の確かな学びをつなぐポイント」を整理することとした。

全体研究会で上がった意見等を踏まえ，「単元レベルで学びをつないでいるところ」「授業レベルで学びをつないでいるところ」「さらに学びがつながるための工夫点」の項目に沿って話合いを行った。次に，学部を縦割りしたグループにおいて，学部で話し合った内容を意見交換しまとめた〔表－45〕。検討の中では「『児童生徒の確かな学びをつなぐ』とは，何か。」という，研究テーマを根本から考察し直したいという意見が出された。そのため，「児童生徒が確かな学びをつないでいる姿」を具体的に挙げながら検討を行い，その姿に近づけるために，教師がどのような工夫を行っていくかをまとめる作業を行った。

〔表－45　「確かな学びをつなぐポイントについての気付き・意見等〕

「確かな学びをつなぐ」とはどういうことか
・生活全般に生かせる力を授業で身に付けることが，確かな学びである。 ・基本的生活習慣がしっかりと身に付いていることが重要である。 ・各教科等の内容の基礎基本がしっかり身についていることが大切である。そのためには，教科の専門性の高い教員が，知的障害の重度のグループを担当すれば，教科の本質（教科の見方・考え方）を踏まえて，児童生徒の実態に応じた目標設定や手立てを組めるのではないか。 ・指導内容の習得のみならず，課題に取り組む方法の習得もその授業で身に付けた力であり，これは他のいろいろな指導の場面に生かすことができる。 ・教師が，学びのつながりを考えて，次の段階の指導内容を設定していくことも重要だが，児童生徒が身に付けた力を使って，課題に取り組み，生活を広げることが大切である。 ・将来の生活，卒業後の生活に生かせる力を身に付けることが必要である。
単元レベルで学びをつないでいるところ
・単元のつながりについては「A→B→C→目標達成」というつながりも，「A＋B＋C→目標達成」というつながりも考えられる。 ・学校行事や学部行事に関連づけて単元を組むと，児童をとりまく生活（学校生活）とその単元（各教科や指導形態での）のつながりができる。「〇〇をがんばろう（楽しもう）。」を，その時期の生活のテーマにすることができる。

・まとまった単元の時間が取れる時間割の工夫が必要である。週 1 時間とか 2 週に 1 回では，生徒の学びをつなげることは難しい。また，授業作りにあたっては，教師が学習のまとまりとしての単元を意識することが必要である。
・前期で学習したこと（言葉）を，後期の単元の中でも取り扱うことで，そのこと（言葉）の理解が深まる事例があった。

授業レベルで学びをつないでいるところ

・児童にとっては，繰り返し取り組むことが重要である。その際，児童が「させられている」のではなく，主体的・意欲的に取り組めるようにすることが大切である。クラスの友だちの注目や，教師による分かりやすいフィードバックや賞賛があることで，児童が意欲を喚起・維持できる。
・毎時間同じ流れの展開で行ったことで，生徒が主体的に取り組むことができるようになった。それもまた，授業同士をつなぐことにならないか。
・発語のない児童の発信の仕方という課題があがった。取組から明らかになった課題に向き合うことも，学びをつなぐということである。実態を把握した上で，コミュニケーションカードや ICT の活用などを考えてはどうだろうか。
・生徒に「させる」という状況にならないように，生徒の「できる」ことを生かして，生徒を「伸ばす」という教師の姿勢が大切である。

さらに学びがつながるための工夫点

・学部全体やクラス全体，縦割りグループなどの複数での集団学習や個別での指導など，学習に適した指導の形態を柔軟に組み合わせて，計画を立てるとよいのではないか。
・普段の生活で使う「般化」まで求めると，何度も繰り返し取り組む必要がある。
・何でも身に付けることができることは理想ではあるが，時間や児童生徒の実態から，すべての指導内容を習得できるとは限らないので，指導内容の重点化が必要となってくる。
・教科担当制の授業の目標や内容を，担当していなくても，担任は把握しておく。実態を他の教科等に生かすには，授業レベルでの授業者と担任の連携が必要になる。年間指導計画作成時においても授業者と担任が連携することで，単元レベルで教科内のつながりと教科間，授業間の横断的なつながりを意識できる。
・教科で学んだことを，学校生活や家庭生活，地域生活につなげることができるように，教科横断的な指導を計画する必要がある。
・次の学年や学部で行っている指導につながるように計画して取り組むことも大切である。
・社会に出た時に必要な指導内容をすべて教えたいと思うと，指導内容が多岐にわたってしまい，長い単元を組むことは難しいと考える。

・誰が何を学んできたのか，今何を学んでいるのかを教師間で共有しておくことが大切である。単元計画や指導案等の保存フォルダを共有できるような，サーバーの整理や管理が必要である。また，教材を共有することも，教師の業務の効率化と生徒の学びやすさになると考える。
・「学習内容表」を使うことで，個人の学びをつなぐことができる。

こうして，各グループで出された意見を基に，「児童生徒の確かな学びをつなぐポイント」を整理し，図にまとめることとした〔**図－74**〕。

(2)　2年次「児童生徒の確かな学びをつなぐポイント」の整理

2年次の授業研究は，1年次に作成した「児童生徒の確かな学びをつなぐポイント」図を意識しながら進めた。今回，研究授業及びその単元を終了し評価まで終わった時点で，「児童生徒の確かな学びをつなぐポイント」の再整理に取り組んだ。

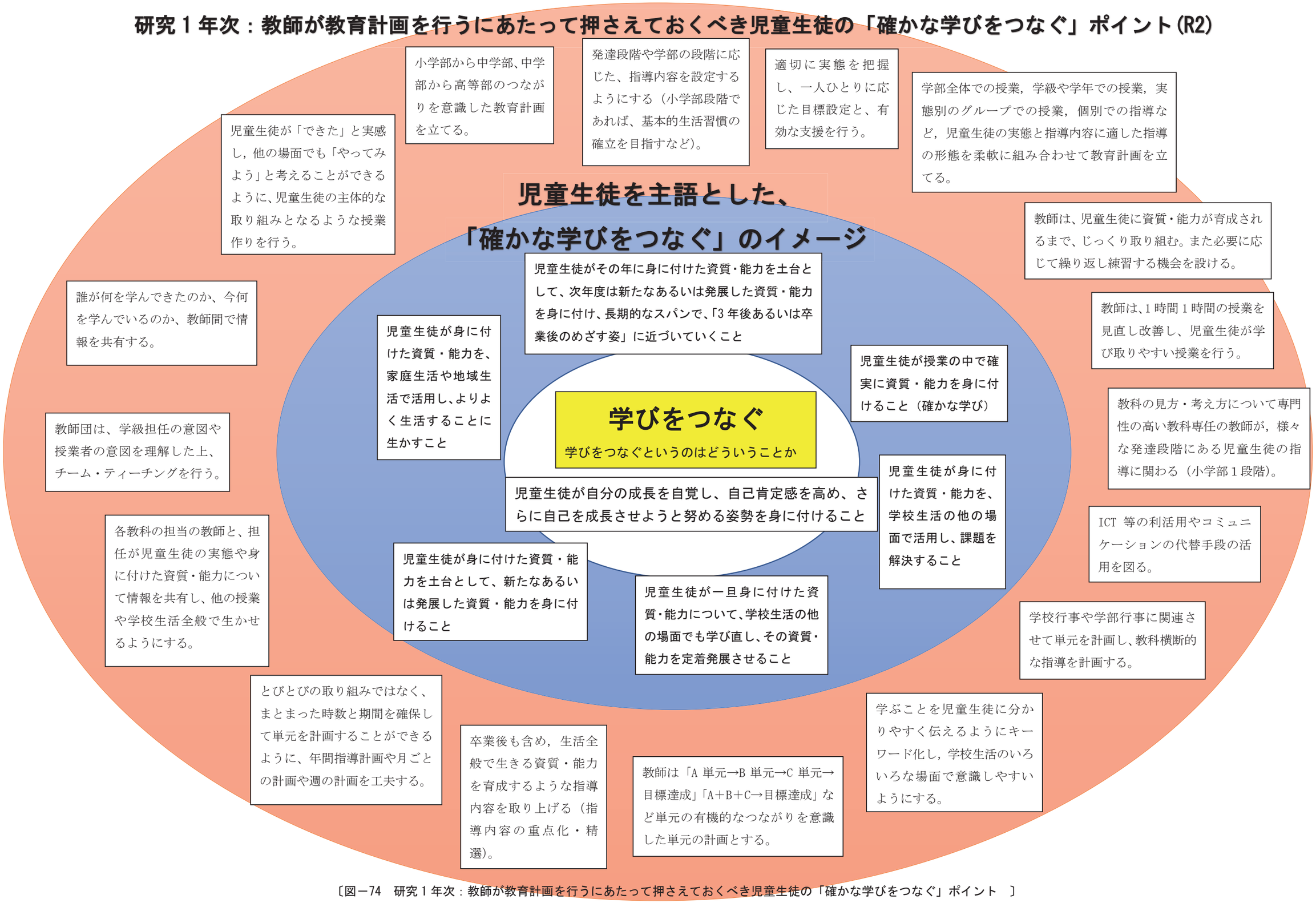
まず，学部研究として，「児童生徒の確かな学びをつなぐポイント」図の構成要素のうち，学部の授業研究の中で，また教師一人ひとりが重視しているポイントを確認した。次に，3学部の縦割りグループで，学部ごとのチェックポイントを出し合い，学部間の重なりや違いを明らかにした上で，図に示したポイントの優先順位を明確にし，本校として重点を置くべき項目を整理するための検討を行った。

本来，教師が指導・支援の際に留意すべきことは，多岐にわたり膨大であるが，留意すべき重点を教師個々が考え思い思いに進めては，「学びをつなぐ」ことには辿り着かないと考える。そこで，本校のカリキュラム・マネジメントに基づいた「児童生徒の確かな学びをつなぐポイント」をより簡潔に示し，共有することによって，単元計画や授業計画の際から，常につなぐ視点と重点を絞る意識をもって取り組めるようになると考えた。

本校では，「確かな学びをつなぐ」ことは，「資質・能力が育成されることで，児童生徒が自分の成長を自覚し，自己肯定感を高め，さらに自己を成長させようと努める姿勢を身に付けること」と位置付けた。それを受けて，2年次は，「児童生徒の確かな学びをつないでいる姿」について，「確実に資質・能力を身に付ける児童生徒」「身に付けた資質・能力を学校で生かす児童生徒」「資質・能力を更に伸ばす児童生徒」「資質・能力を地域生活や将来の生活で生かす児童生徒」という姿の連続性のある集合体であるという考えとしてまとめ，図示した。

また，これらの児童生徒の姿に近づくためには，教師はどのようなことを意識しなければならないかについては，1年次で挙げたポイントを更にまとめて四角囲みにし，「児童生徒の姿」の周りに配置した。1つのポイントが，2つの「児童生徒の姿」の領域に重なっているものもあるため，明確に分けたり，異なるものとして捉えたりするものではないと考え，ベン図で表した。

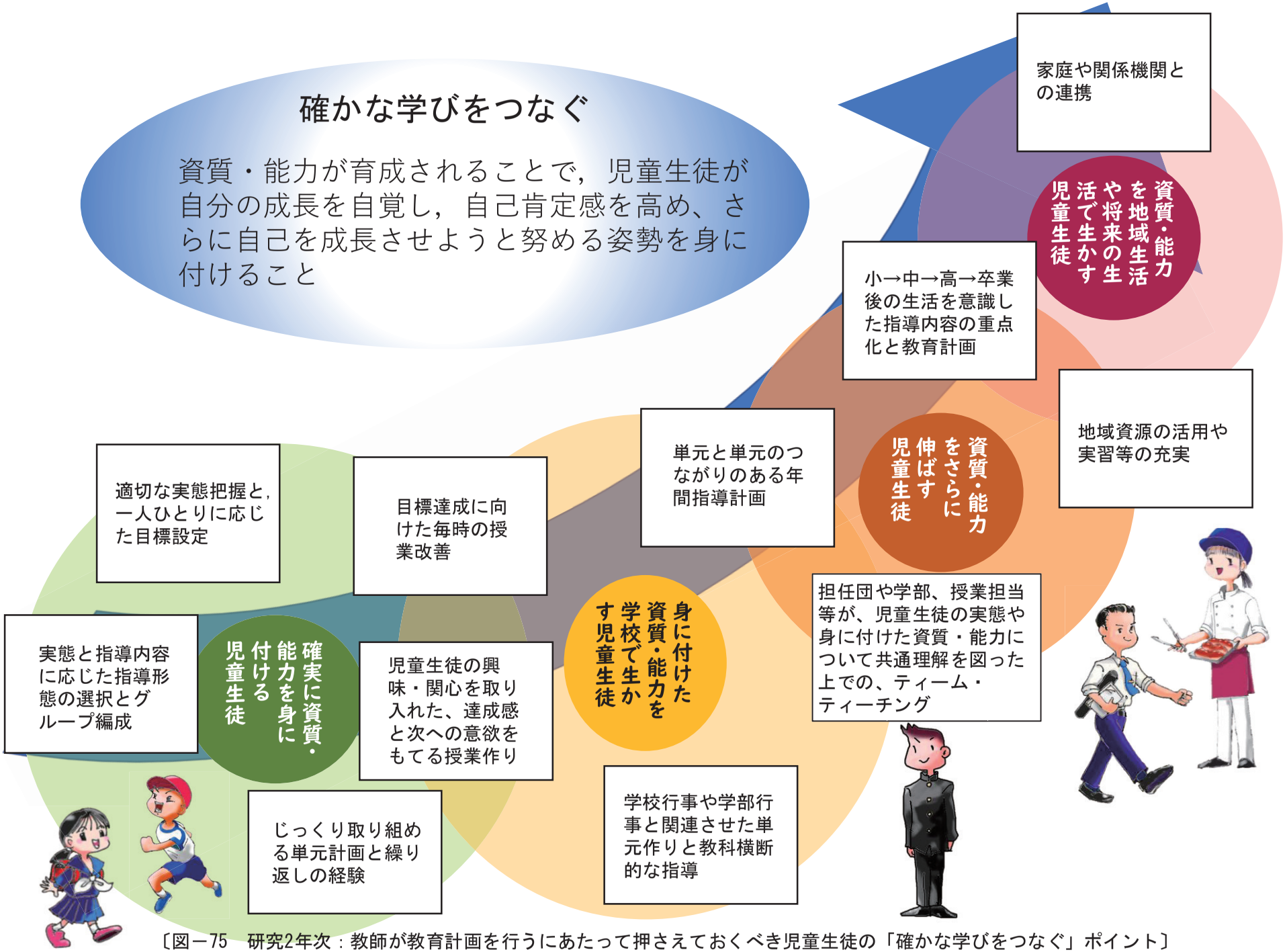
研究１年次：教師が教育計画を行うにあたって押さえておくべき児童生徒の「確かな学びをつなぐ」ポイント(R2)



〔図－74　研究１年次：教師が教育計画を行うにあたって押さえておくべき児童生徒の「確かな学びをつなぐ」ポイント　〕

配置してみると,「確実に資質・能力を身に付ける」ポイントや「身に付けた資質・能力を学校で生かす」ポイントに比べ,「資質・能力を地域生活や将来の生活で生かす」ためのポイントが，かなり少ないことが分かった。そこで，今回の学部別授業研究や日々の授業実践において,「資質・能力を地域生活や将来の生活で生かす」視点ではどのような工夫をしたかを洗い出し,「家庭や関係期間との連携」と「地域資源の活用や実習等の充実」というポイントを新たに加えることとした。

「児童生徒の確かな学びをつなぐポイント」図の再構築に当たっては,「『児童生徒が確かな学びをつないで成長する』ことを支えるのは,『教師が把握しておくべき，指導支援の在り方のポイント』」を押さえることである，という関係性が分かりやすくなるよう改善を図った〔**図－75**〕。



〔図－75　研究2年次：教師が教育計画を行うにあたって押さえておくべき児童生徒の「確かな学びをつなぐ」ポイント〕